

戦後開拓地における学校と地域社会（1）

— 1970年代の小学校分校における教育実践と地域社会の相互作用に関する事例研究—

School and community in Postwar Reclamation（1）

A case study on the interaction between Educational Practice and Community
over a branch elementary school in 1970s

高瀬 雅 弘*

Masahiro TAKASE*

概 要

本稿は、戦後間もなく「緊急開拓事業」によって成立した戦後開拓地をフィールドに、1970年代に小学校分校に勤務した教員の教育実践とライフストーリーを手がかりとして、学校と地域社会との関係性が、地域固有の文化の形成や発展にどのように影響していったのかを考察するものである。具体的には、①当時の学校が置かれた教育課題を地域特性との関連のなかで捉える、②課題解決のための学校と地域社会の関係性構築の様態を明らかにする、③戦後開拓地という、新しい共同体における学校という場の存在意義を分析する、④戦後開拓地での教育経験が教師の自己形成にもたらした意味を問う、といった作業を通じて、戦後開拓地における、学校を基盤とした地域文化形成のありようを明らかにする。

キーワード：戦後開拓 分校 へき地 地域社会 教育実践 教師

1. はじめに

（1）関心の所在

青森県岩木山麓、鱒ヶ沢町山田野地区¹の一角に、山田野集会所という施設がある。2002（平成14）年3月まで、鱒ヶ沢町立鳴沢小学校山田野分校の校舎として利用されていた建物であり、1954（昭和29）年4月の開校以来、地域の人びととともに歩んできた場所である。

山田野地区は、1945（昭和20）年11月に策定された、「緊急開拓事業実施要領」に基づいて開墾が進められた戦後開拓地のひとつである。約5000haにも及ぶ広大な陸軍演習場跡地は、戦争によって職業や住居を喪失した人びとが新たな生活を模索する場となった。同年末には早くも30戸が入植し、入植計画戸数は100戸とされ、1948（昭和23）年の時点では入植戸数100戸、既開墾面積115町歩、住宅数63軒を数えるに至っている²。

開墾の進捗に合わせて、各開拓地では生活インフラ

の整備が喫緊の課題となっていた。それは住宅に始まり、診療所、電気施設、飲用水施設、婦人ホームといったものであり、これらと並んで必要とされたのが小中学校分校であった。開拓地における分校建設の補助制度は、1946（昭和21）年度に確立された。このときの補助対象は、入植者家庭の児童生徒が通学するために必要な校舎の新増築と、へき地教育振興法に規定されたへき地分校に勤務する教員住宅を、当該市町村が建設する場合であり、その条件は新築の場合、最寄りの既設学校までの平均通学距離が概ね3km以上ある、通学困難な開拓地とされていた³。青森県では、1947（昭和22）年度から1963（昭和38）年度までの間に、48校が新築、増築は1947（昭和22）年度から1966（昭和41）年度までに36校となっている⁴。

本稿の大きな課題のひとつは、上記のような形で設置・整備されていく学校の存在意義を、教育機会の提供といった側面から捉えるのではなく、戦後開拓地という地域社会のなかに位置づけることにある。それは、戦後開拓地において形成される共同体の特性に由

* 弘前大学教育学部社会科教育講座

Department of Social Studies Education, Faculty of Education, Hirosaki University

来するものである。

戦後開拓地を、共同体論の視角から分析した蘭信三は、開拓村落を「選択的」共同体、すなわち「地域の共同体を、『自然に与えられた』、個人に『所与』なものとしてだけ考えるのではなく、個人の主体的『選択』にもとづいて形成された共同体」として捉えたいうえで、共同性やきずなどといったシンボル共有体としての性格を明らかにしている⁵。そのうえで、蘭のいう、共同性やきずなどといったシンボルの基盤となったのが、戦後開拓地における学校の存在であったのではないか、というのが本稿の仮説である。

本稿では、1970年代という時期に注目する。戦後開拓行政の動きを追うとき、1969（昭和44）年10月に農林省によって開拓農政の一般農政への統合方針が示され、1975（昭和50）年度をもって統合が完了し、戦後開拓は行政上終了する。この時期の開拓地に目を向けると、「緊急開拓事業実施要領」時の入植者からは多くの離農、転業者が生まれており、農業を継続する人びとと、そうでない人びととの区別が明確になっていた。さらにこの時期には開田ブームとその後の減反政策によって、営農したいが大きく揺さぶられることとなった。こうした戦後開拓地の歴史の大きなメルクマールとなる時期における、学校と地域社会の関係性を問うことがもうひとつの大きな課題である。

（2）先行研究の知見と分析課題

戦後開拓地における学校教育の問題を、へき地教育研究のなかに位置づけたとき、そこには分厚い先行研究の蓄積がある。たとえば1953（昭和28）年2月に第1号が刊行された『僻地教育研究』（現在は『へき地教育研究』）には、複式学級や少人数指導といった、本稿で取り上げる教育課題についての豊富な成果が積み重ねられている。

しかしその一方で、対象地域を戦後開拓地に限定したとき、そこに対する関心は決して高いとはいえない。もっとも、『僻地教育研究』においても、同時代的な問題意識から戦後開拓地をフィールドとした研究⁶は見られる。ただしこれらの研究は、戦後開拓地の特性や問題状況を描出することが中心となっており、学校と地域社会の関係性を問うものとはなっていない。また、1950年代の教育社会学においては、同じく同時代的な関心から、戦後開拓地を対象とした研究が見られる。馬場四郎は、岐阜県の戦後開拓集落を対象として、コミュニティ・スクール理論の適用の可否についての検討を行っている⁷。そこでは若者たちに

よって構成された開拓団に見られる共同性や、思考の進歩性・科学性といった特性を見出し、新たな教育の可能性を展望している。また籠山京は、北海道の戦後開拓地をフィールドとした論考⁸において、「上向きの開拓地」「下向きの開拓地」というカテゴリーを用いつつ、村づくりの中心としての学校の意義や、労働と教育の関連づけについての考察を行っている。しかしその後、こうした問題関心を引き継いだ研究は、管見の限りほとんど見られない。

もっとも、戦後開拓地を対象としたものではないが、本稿と重なる時期の山村小学校が地域社会に果たした機能を、「ソーシャルワーク的支援」として明らかにした田中・大津・高木による研究⁹が、近年生み出されている。ただし、その対象地域が持っている「地縁血縁」といった要素は、戦後開拓地には見出しがたいものであり、戦後開拓地での地域課題は、その再生産というよりは、「地縁血縁」に代わるものの構築であるといえる。したがって、地域社会にとっての課題や学校の持つ意味は、戦後開拓地とそれ以外とで異なった位相を示すと考えられる。

以上のような研究状況をふまえ、本稿では、以下のような分析課題を設定する。

第一に、1970年代における戦後開拓地の学校（小学校分校）が置かれた状況はいかなるものであり、とりわけどのような教育課題に直面していたのかについて考察する。ここでは当時の全国的なへき地の学校に通底する要素とともに、対象となる地域社会の特性についても考慮する。

第二の課題は、戦後開拓地の学校が抱えていた教育課題の解決に向けた取り組みにおいて、学校と地域社会とがどのような関係性を持っていたのかを明らかにすることである。課題解決のための運動における、両者の関係性に見られるベクトルの方向性はいかなるものであったのかを検討する。

第三に、教師の視点から捉えた、戦後開拓地における学校という場が持つ意味について考察する。学校を作る、維持するという過程において、戦後開拓地という地域の固有性はどのように表れているのか（あるいは表れていないのか）について分析する。

第四に、戦後開拓地の学校での教育実践が、当事者である教師自身にとって、いかなる意味を持つものであったのかを考察する。そこでは相対的に劣悪な教育環境での「労苦」とともに、地域社会や子どもたちと関わるなかで得た「実り」とは具体的にどのようなものであったのかを問われることになる。

以上のような作業を通じて、戦後開拓地の地域社会にとって、学校は何をもたらし、そしてそれはいかなる形で形成・維持・強化されていったのかについて考察する。

2. 対象と方法

（1）事例の概要

1945（昭和20）年11月に策定された「緊急開拓事業実施要領」に基づき、それまで陸軍演習場であった土地を開墾する形で成立した、青森県鯉ヶ沢町（旧鳴沢村）山田野開拓地と、そこに1954（昭和29）年4月に開校した鳴沢小学校山田野分校¹⁰が本稿の対象である。

その多くが既存の集落から離れた場所にあった戦後開拓地においては、子どもの通学の不便さが問題となり、開拓政策の一環として、小学校分校の設立支援が行われた。山田野開拓地においては、1951（昭和26）年から、西地方事務所長および農林省農地局入植課より山田野開拓農業協同組合長に宛てて、小学校分教場建設についての計画書提出が要請されている。こうした動きのなかで、1953（昭和28）年7月25日付で山田野開拓農業協同組合より「山田野開拓地分校設立陳情書」「分校敷地承諾書」が鳴沢村長宛に提出され、以後諸手続を経て1954（昭和29）年度からの小学校分校の開設が決定した¹¹。

「山田野開拓地分校設立陳情書」によれば、当時の開拓地の面積は450町歩、入植戸数は78戸、人口は約400名であり、広大な敷地に点在する各住宅から既存の学校までの距離は1.5～4.0km、とりわけ冬期の降雪時の通学には大きな困難がともなうことが述べられている。学校の建設にあたっては、請願者である山田野開拓農業協同組合をはじめ、地域の人びとが資材の提供や作業への協力を惜しまなかったという。在籍児童数は発足時の1954（昭和29）年度が23名、1965（昭和40）年度までは20名前後、1975（昭和50）年度までは10名前後で推移し、以後は1984（昭和59）年度の10名を除けば5名前後で、2001（平成13）年度をもって閉校（本校である鳴沢小学校に統合¹²）に至っている。

ほぼ半世紀にわたる山田野分校の歴史のなかで、本稿が対象とするのは1969（昭和44）年度から1974（昭和49）年度までの6年間である。この期間は、分校教育の困難さの象徴ともいえる三部複式授業が解消され、教育環境の充実が図られるとともに、それに向けた動きのなかで学校と地域社会の関係性が大きく発展していった時期である。1人の教師の在任期間とも重

なるこの期間を、本稿の分析対象とする。

（2）研究方法

『青森県戦後開拓史』『青森県教育史』『鯉ヶ沢町史』等の文献資料を参照したうえで、2015（平成27）年3月に山田野分校の元教員1名を対象に、ライフヒストリーインタビューを実施した。調査内容は、基本属性（氏名、出生年、教員になったきっかけ、分校着任の経緯）、山田野地区の印象（赴任したときの様子、保護者や子どもたちの姿、出稼ぎの影響）、山田野分校での教育実践（分校ならではの工夫や苦勞、学校行事、保護者や地域の人びとへの働きかけ）、三部複式解消運動の内容（きっかけ、地域の人びとの協力、実現までの道のり）、分校教育研究会の活動（課題と準備、当時の様子、研究会開催の効果）、自身にとっての山田野分校の意味（その後の教育経歴への影響、教師人生を振り返ったときの意義）、の6項目である。

聞き取りに基づくフィールドノートに加えて、対象者自身がまとめた同時代的な記録、その後の回顧的な文章（記念誌などに寄稿したもの）、書信による当時の記録、といった情報の提供を受けた。したがって、本稿の対象となる資料には、大きく分ければ同時代的なものと事後的なもの2つが存在し、さらに後者については、調査時点から見たときの過去のものと現在のものとが存在する。

（3）対象者

ライフヒストリーインタビューの対象者は、山田野分校の元教員である山谷信雄氏である。山谷氏は1932（昭和7）年、西津軽郡森田村（現つがる市）生まれ。旧制中学校に進学し、在学中に新制高等学校への移行となり、高校卒業後、1951（昭和26）年に助教諭として教師としての歩みを始める。最初の勤務校は鶴田町の水元小学校であった。早くから作文の指導にも熱心に取り組み、羽仁説子が責任編集者であった時代の『子どものしあわせ』誌には、山谷氏の実践事例が紹介されている¹³。

以後西津軽郡を中心に各校で教鞭を執り、山田野分校には1969（昭和44）年4月に赴任する。前任校は森田村立森田小学校床舞分校で、やはり小規模な分校であった¹⁴。山田野分校赴任当時は、すでに18年近くのキャリアを持つ、中堅教員であった。山田野分校には、1975（昭和50）年3月までの6年間勤務した。また、校長として1986（昭和61）年に赴任した木造町立出来島小学校でも複式学級児童数削減の運動に携わっ

ている。そして、1993（平成5）年3月、鱈ヶ沢町立舞戸小学校長を最後に教職を終えている。退職後は郷土史家としての活動も行ってきた人物である。

（4）倫理的配慮

本稿では、「日本教育学会の会員が取り扱う個人情報保護等に関するガイドライン」「一般社団法人社会調査協会倫理規程」に則り、対象者に対して事前および聞き取り調査時に本研究の趣旨と内容を書面および口頭で説明し、同意を得たことを確認して調査を実施した。なお対象者の氏名については、本来であれば匿名とするのが通例であるが、すでに既刊書籍・資料等において自身が原稿を発表されていること、また個性ある教師の歩みを匿名性に埋没させるよりも、固有のすぐれた実践として記録することの意義を鑑みて、対象者への説明と了解を得たうえで実名での記述とした。

3. 山田野分校への着任

1969（昭和44）年4月、山谷氏は山田野分校に分校主任として家族とともに赴任する。当時分校に勤務する同僚は山谷氏の他に1名のみであった。当初入学予定者のいなかった山田野分校には、山谷氏の長女が赴任と同時に入学することになった。急ごしらえで入学式が挙行され、山谷氏の一家は、山田野の地域を挙げて迎えられた。

（1）驚き

すでに分校での勤務経験があった山谷氏にとって、山田野はひととき「へき地」の印象を与えるものであったようだ。

最初行ったところは、なんか寂しい感じでしたね。この辺（山谷氏の現住地）であれば、隣がすぐある（家がある）のだけれども、（山田野は）100メートル、200メートルも行かないと隣の家がない。こちらに森田の（街の）灯、そして五所川原の灯がずっと向こうに見えるということで、寂しく感じましたね。行ってから2、3日は。

当時の山田野は、昭和40年代の開田ブームのなかにあった。といっても、周辺の森田村などの人びとが山田野の土地を入手しながら開田していく形になっていたようで、「緊急開拓事業」期の入植者たちのなか

で、離農する人はすでに離農してしまっており、山田野分校の学区内には15戸、学区外の開拓地に15～20戸程度が残る、という状態であった。つまり農業を続ける人びと、離れた人びとがはっきり分かれていた。

そうしたなか、山谷氏一家は迎えられる。そして分校の入学式の日、山谷氏は大きな衝撃を受けることになる。

分校に行ったときに、私の娘1人入学することになって、それを入れて全校生徒9名だから、前からいる子どもは8名ですね。私の娘を入れて9名なのだけれども、急遽、1年生が行ったもので入学式をやることになって。在学家庭は、児童を入れ（通学させ）ている家庭は5戸、分校の学区内の全家庭が15戸であったんです。それなのに、入学式に来た人は30人ぐらいあったのです。お父さんもお母さんも、児童が入っていない家もみんな来るからね。あと、おばあさんも来たりとか。それで30人ぐらいも来て、もうびっくりしてしまったね。

分校の入学式には、在校生のいない家庭からも、入植第一世代（子どもたちから見れば祖父母世代）、第二世代（父母世代）といった人びとが文字通り地域総出で集まってきた。そのときの印象はとても鮮烈なものとなった。

入学式から1か月ほど経った5月には、運動会が開催された。それは入学式以上の盛大なイベントであった。

それが今度は運動会があって、運動会は、全校たった9名の運動会なんだけれども、そのときは山田野の15戸だけでなく、山田野から一緒に入植した人でも離農していった人たち、弘前にいる、鱈ヶ沢の本町にいた、五所川原に住んでいる、そういう人たちもちょうど運動会のころは花見、分校のところは桜の花が咲くもので、花見を兼ねてあちこちから集まって、もう盛大なものでした。

すでに入植開始からは四半世紀近く、分校の開校からも15年になろうとしていた。入植者は初期の約100戸から、半数にも満たないほどに減少していた。にもかかわらず、学校の行事のたびに、すでに地域を離れてしまった人びとが集まってきたのだった。運動会、そして学芸会もまた地域を挙げての行事となっていた。

学芸会は、まず、全校（児童は）、9人か10人でしょう。多くて11人の時代もあったかな。それで25～26個のプログラムをこなすのだけれども、晩にやって、そのときには30人も40人もいっぱい、学区外の人たちも来る。夜6時ごろからやるのだけれども、1人で舞台に立つのが10回以上。器楽合奏だ、合唱だ、学芸会のはじめの呼びかけとか、お話だとか、踊りだとか、あるいは、そのほかに紙芝居だとか、それも1人で1つではなくて2人、3人で複数やるものだから、結局1人で10回以上舞台に立つのですね。それを1か月もしないうちにちゃんと覚えて、そしてやるという力は、すごいものだなと（感じた）。初めて、子どもたちって、「自分で何をやればいいのか」ということをわかったときには、何ぼでも頑張るものだなということを教えられたのですよ。

学校参観日には、すべての父母が揃って参加するので、出席率は200%だった。このような一連の学校行事と関わっていくうちに、山谷氏はこの地域が持つ独特の力を感じるようになっていく。

私は感じたの。第一、入学式にそう（人が）集まる。それを見て、私がショックを受けるほど山田野はすごいところだと。そういうふうなことを感じたからなおさら安心して何でもやれたのかもしれない。

山谷氏は、もともとは鱈ヶ沢町に隣接する、旧森田村（現つがる市）出身で、いわば「地元の人」であった。しかし山田野に赴任すると、むしろ自身が「異邦人」であった。

分校の学区の人たちは元軍人、元引揚者、元会社のサラリーマン、教養のある人たちばかりですね。そういうことで、ことばも私が津軽弁で、あとの人たちが共通語といった具合で。これは随分勉強させられました。

それまでに経験したことがないような、戦後開拓地の独特の地域文化、とりわけ学校教育に対する高い関心のなかで、山谷氏の山田野での教育実践が始まった。なお、西北地域の分校教育の実情をまとめた資料には、当時の山田野分校の児童の実態について、次の

ような記述が見られる。

非常に活発に^{ママ}明かるく見えるが、他地域の子どもの生活状況学習状況等を知らないために、意欲的でない面が見られる。しかし、ものおじすることもなく、言われたことはすなおによく聞いて行動する。自分からすすんでどんどんやって行こうとする面で劣るように思われる。¹⁵

こうした児童観は、山谷氏の教育実践における課題意識の根底をなしていくものであった。

（2）模索

地域の人びとに強く支えられた山田野分校であったが、そこには大きな困難もあった。山谷氏が着任した当時の山田野分校は、2名の教師しか配置されておらず、1人の教師が3学年を受け持つ、いわゆる三部複式という体制であった。それまで分校での勤務経験こそあれ、複式授業じたい、山谷氏にとって初めて体験するものであった。

第一、三部複式って、複式もやったことないので、何からどう手をつければいいのか、全く我流です。ずっと6年間過ごしたようなものです。それで、仕方がないから、もう1人の先生と相談しながら、「いい方法がないもんだか」「こうしてやるべし」「ああしてやるべし」って、私もどうすればいいのかわからないことが多くて。それで、合同音楽、合同体育、器楽を一緒にやったりとか、合唱斉唱と一緒にやったりとか、体育は跳び箱をやれば、段の低いのから高いまで用意して、跳べるのを跳ばせるとか、一緒に遊ぶみたいなのだけれども、そういうことで合同の授業をすることをやったりとか。

分校主任の山谷氏が本校や教育委員会に出張する際には、もう1人の教員が全学年を指導しなくてはならない。ある年には、1人の教員が病気入院となり、講師が配置されるまでの1か月間、全学年の指導を1人で行ったこともあった。その際には、本校への通学を保護者たちに提案したが、「そうしたことをすれば、統合のきっかけを作ってしまうので、何とかして先生、1人で頑張ってください」といわれたという。

複式と三部複式とでは、実際に授業を行ってみると大きな違いがある。

複式なら、「はい、ここやって。一緒にここ勉強しよう」ということになるのだけれども、3つにもなれば、どうしても1つ余ってしまうと感じたのです。というのは、「はい、4年生は一緒に勉強するからこっち見て」とか、「6年生は算数の教科書の何ページの計算問題を計算して」とか、そして、「何年生はこのプリントをやって」と3学年やるわけですけれども、そうすれば、始めたと思えば6年生の児童が「先生、計算もう終わった」って来てしまうわけです。今度は、時間がなくて、「はい、これを見て」って教師用の赤刷りの（答えが書いてある）教科書。あれを見せて、「はい、ここさ答え書いてるはんで、これで丸つけて」って、いったこともあった。

あるとき、教育事務所から指導主事が訪問することとなり、事前に質問事項があったら文書でお知らせくださいという依頼が通知と一緒に来た。そこで山谷氏は「たった9人という学校、極めて小さい学校での体育や音楽をどういうふうに指導すればいいか教えてください」という趣旨の質問を提出した。指導主事が訪問した際に返ってきた答えは、「所内会議を開いて指導主事全体で相談したけれども、いい方法がないので、好きなようにやってください」というものだった。以後、山谷氏は全学年の合同体育・音楽の授業を組み立て、図工やクラブ活動も全校合同で行うようにした。そして「担任する子どもを3つの学年としてとらえるのではなく、そこにいる5人の子どもの個別指導を」¹⁶という考え方に至る。すると自学自習の態度が身につく、どんどん先に進もうという意欲がわいてきたという。明らかに子どもたちの姿が変わっていった。それは山谷氏の教育観じたいをも揺さぶるものであった。

それまではできる子どももあるし、できない子どももあるものだと、そういうふうに考えていたのが、山田野に行ったら、それが通用しなくなったのです。というのは、人数が少ないからできたということを教えられたのですが、ある子ども、算数の繰り上がり、繰り下がりがわからない子どもを、（指導法を工夫しながら）手を取って教えていったら、そうした計算もできるようになったのですね。それで、その子どものお父さんが、「分校さ来たら、おいのわらし、勉強覚えるようになったじゃ」ってとっても喜んでくれて。だから、私は大抵の子ども

もちゃんと教えさえすれば覚えるものだということを知られたのですよ。

こうした取り組みの成果は、やがて近隣に伝わり、山田野分校では子どもが大切にされ、勉強ができるようになるという話が広がって、学区外からの転入学希望者が出るようになり、教育委員会の承認のもと、通ってくるようになっていった。

4. 分校研究会と三部複式の解消

山谷氏が山田野分校に赴任して4年目の1972（昭和47）年9月、山田野分校を会場に、西北分校教育研究大会（以下分校研究会）が開催される。そして分校研究会をひとつの契機として、三部複式による学校経営の解消に向けての動きが進んでいく。

（1）分校研究会の開催

分校研究会は、1959（昭和34）年に開催された西北教育事務所主催の分校主任会議をきっかけとして発足したもので¹⁷、西北教育事務所管内の学校が1年ごとに持ち回りで開催校となり、授業公開や研究発表、それぞれが抱える課題についての議論を行うものであった。

開催にあたって、山谷氏はそれまでの分校研究会とは異なった試みを行っている。通常、研究会は昼間に分校で行い、夜には町場の旅館に移って、旅館で懇親会と議論を行い、宿泊を行うというものであった。それを「どうせやるのであれば、山田野のことをちゃんとわかってもらいたいと思って」、山田野地区の婦人ホーム（戦後開拓地に設けられた集会所的施設で、1960（昭和35）年より予算補助が行われた）で懇親会をして、宿泊もしてもらうことにした。そうすることで、懇親会には、児童の保護者をはじめ、地域の人びとが多く参加した。このとき、山谷氏は、それまでは教師たちのみで行っていた分校研究会に、保護者にも参加してもらうことを提案し、実現させた。これをきっかけとして、以後も山田野の人びとが、研究会の他の分校の様子を見学し、交流する機会が続くようになった。それは保護者の側から見ても意義あるものとして評価されている¹⁸。

山谷氏が分校研究会の前後にまとめた資料がある。山田野分校での分校研究会を総括する「山田野の教育を更に前進させるために」と題した資料¹⁹の冒頭に掲げられた課題は、小規模校ゆえに「他から学び合うと

いう条件に恵まれていない中で、どのようにして、しっかりと生きていく力をつけさせ伸ばしてやることができるか」というものであった。そのなかの「創造性を引き出し育む仕事を」「教科の力をしっかりとつけていく仕事を」「具体的に進めていく上で考えたいこと」「地域住民と共に教育を前進させる活動を」といった各テーマは、他の地域や学校に共通する普遍性を持ちながら、一方では「山田野の地域に根ざした・山田野の地域に応える教育」を創り出すことが強く押し出されている。それは教科指導においては、「社会科や理科や家庭科の中に、山田野の歴史・自然・生活文化・産業の状況等をどう位置づけていくか」といった課題となって表れている。

しかし、「山田野の教育を更に前進させるために」のなかで、ひととき強く意識されているのは、「地域住民と共に」という側面である。そこには前述のような参観日の出席率の高さ、入学式や卒業式の際の地域の人びとを挙げての参加といったことに言及しつつ、その具体的な取り組みとして、参観日を每学期1回から毎月1回とし、「子どもの教育を語り合う会」としていること、分校だより『やまだの』を、児童が在籍している家庭だけでなく、学区地域内の全家庭15戸に配布する、といったことが紹介されている。毎月1回の参観日は、農業を生業とする地域においては、保護者にとってもそれなりの負担であったと想像される。しかし山谷氏の呼びかけに保護者たちはしっかりと応えていた。

こうした取り組みについて、当時の山谷氏は、そのときに抱えていた葛藤も率直に綴っている。「子どもの教育を語り合う会」が、分枝在籍児童の家庭のみになっており、自身が考える「分校の教育と地域との関わり」を考える場となり得ていないこと、分校だより『やまだの』で何を発信すべきか、形式的・機械的になっているのではないかと、といったことが反省的に考察されている。それでも、これら一連の地域社会に学校を開く実践は、山谷氏の赴任によって初めて行われたものである。それは、分校研究会終了直後に山谷氏がまとめた「山田野の教育をより前進させるために」という資料に綴られた、次のような意識に支えられていた。

そのような（分校一引用者）教育を営む上で、どうしても考えないでいられないこととして、父母とのかかわりや地域社会とのかかわりもあるので、そのことについて述べておきたい。

そのことを、ひと口に結論的に言うならば、ここ山田野のような超小規模校では、必要以上に、その「地域社会とのつながり」というものを重視しなければならないし、そのことを抜きにしては学校教育すら進めて行けない状況となる—と言えるだろう。

山谷氏は、分校研究会の配付資料に、参加者に後日感想を送ってもらうための用紙を添付した。今も山谷氏の手元にある20通あまりの感想文からは、『教育にへき地も分校も無い』の一つの実証を参観できました」「地域の指導者としての活躍と信頼…学ばせられました」「本物のPTAは、県下広しといえども貴校だけでしょう」といった反響が見て取れる。

結果として、山田野分校での分校研究会は成功を収めた。山谷氏には、それはかなりの程度予見できたものだった。

それも山田野の人たち、山田野にいたからできたのですね。というのは、山田野に泊まったの研究会をやろうと思ったのも、山田野で分校研を簡単に引き受けたのも、山田野のPTAって、児童が入っている人だけではなくて、学区の児童が入っていない人たちもみんな応援してくれるっていう自信があったから。

そして、この分校研究会は、かねてからの懸案であった三部複式の解消に向けた力を生み出していく。

（2）三部複式の解消

上述のように、三部複式による学校経営は、山田野分校が抱えていた最も大きな困難であった。複式授業やへき地教育について議論する分校研究会のような場においても、三部複式の学校じたいが少数であったため、問題意識を共有するのは難しかった。

あちこち研究会に行っても、なかなか複式のことでも語られない。せいぜい複式の授業を見るけれども、三部複式なんて見たこともないし話し合いにもならないということで、三部複式の学校に行ってみるか。分校を休みにして、今日は松代分校（芦沼小学校第二松代分校（鱈ヶ沢町））とか、今回は深浦の松原分校（明道小学校松原分校）や長慶平小中学校（独立校でありながら三部複式校だった）だとか、この次は共栄分校（妙堂崎小学校共栄分校（鶴田町））に行ってみようとか、1年に2回ぐらい

ですか、2年ぐらいで4つの分校や学校を回ったことがあるけれども、そして、その学校にお土産を持っていきながら、酒1升、お菓子なんてあのころはそういう時代であったからね。それで、一緒に授業を見せてもらって話し合いしてということで来んです。

山田野分校での分校研究会には、西北教育事務所の所長も出席し、分校の宿直室に宿泊して実情を視察し、また参加者たちの声に耳を傾けた。もちろん山谷氏も、公開授業を通して、三部複式による学校経営の困難さを訴えた。

分校研究会終了後ほどなくして、西北教育事務所長から書信が届いた。そこには「三部複式は、現にやっってもらっていますのに今更の感がありますが、あれは解消の義務があります。(中略) 所長会議で特に要望し、学務課長の了解をとりつけましたが頑張ります」とあった²⁰。そしてひと月も経たないうちに、青森県教育委員会が視察に訪れる。

県教育委員会の学務課から(義務教育班長以下の職員が)現状の山田野に視察に来たり(9月)とか、あるいはその後、指導課からも(小学校班主任指導主事が)視察に来たり(11月)とか、そうしているうちに、所長とも連絡しながら、PTAで請願書を出すことにした。

山田野学区会では、早急に会議を開き、地域住民やPTAの声を行政に反映させるべく、県議会に対して請願の運動を開始した。その際には、同じく三部複式による学校経営が行われていた、芦薈小学校第二松代分校(鯉ヶ沢町)、明道小学校松原分校(深浦町)にも呼びかけて、合同して運動を進めることになった。そして1972(昭和47)年12月12日付で、青森県議会議長宛に「教員増配置による三部複式解消に関する請願」が、3つの分校の学区会・父兄会・PTA会長の連名で提出された。この間、西北教育事務所からは、五所川原市を訪問した県議会文教常任委員会の一行に対して、三部複式解消の要望書が提出され(10月)、また青森県教職員組合からも同様の趣旨の請願書が提出された(12月)。

こうした努力が実り、青森県の単独事業として、次年度から、県内のすべての三部複式が解消となり、1年生から6年生までである三部複式校は3学級編成となって、2名配置の教員が4名配置に増員されること

となった。1973(昭和48)年4月、「山田野分校開校20年・三部複式解消記念式典」が、多くの来賓と地域の人びとを迎えて開催された。参加者全員が「ふるさと」を斉唱して、悲願がかなったことを祝った²¹。

もっとも、この三部複式の解消は、山谷氏の計画を狂わせた。赴任当時、「3年もいれば転勤できるだろう」と思っていた山谷氏だったが、分校研究会の開催が決まっていたために、4年目も山田野分校に留まった。そして、分校研究会も無事終了し、三部複式解消の道筋もできた。山谷氏は転任を考えていた。

今度は11月、12月となれば人事調書、転任するか留任するかという書類を出すでしょう。それで転任の書類を出して、今度は違う学校、便利なところに行こうと思っていたのですよ。そうしたら、今度、私のところ(自分の子ども)で5年生になると3年生になると、学年1人ずつ見ているのですよ。私がいなくなれば、(ともに転出するので)2つの学年(の児童)がいなくなって、複式2つにしかない。そうすれば、先生が増えないことになる。せっかく山田野の人たちが一生懸命になって(三部複式を)解消してくれたのに、私がいなくなったら、先生が増えなくなって困るなど。それでまた急遽、留任することにする、と校長に話をして、書類を出し直して、(上の子どもが)6年生までの6年間、そこにいることになってしまったのです。

こうして、当初は3年で転出するはずだった山谷氏は、異例の6年という長期間にわたって山田野分校に勤務することとなった。だが、それだけ長く、深く山田野と関わることで、そこでの印象は地域の人びとにも、そして山谷氏自身にも深く刻み込まれることとなった。

5. 心のよりどころとしての分校

地元出身で、またその地域に根ざした教育実践を行ってきた山谷氏にとって、山田野分校とそれを取り巻く地域の人びとはどのように映っていたのか。豊富な教育経験のなかでも、山谷氏が捉えた山田野の地域特性というものが確かにあった。

山田野開拓地は、多くが農業経験のない人びとによって開墾された地域である。山谷氏も、真偽のほどは定かではないが、「豆を熱くして植えれば早く芽を出すということで、本当に鍋で豆を炒ってしまったっ

ていう」地域に伝わる荒唐無稽な逸話を耳にしている。つまり、イチからどころか、マイナスから農業を始めなければならず、そこからの労苦がにじむ土地であった。加えて地縁も血縁もない人びとが寄せ集まってできた、もともとは脆弱なコミュニティでもあった。

郷土史家でもある山谷氏は、分校研究会当時、「山田野の教育をより前進させるために」にこう綴っている。「山田野の歴史はたった27年間だけど、その27年は非常に起伏の多い変化の大きい27年間であったわけで、それをまとめるとすれば1冊の本になるぐらいのものとなるだろう」。

その「起伏の多い変化の大きい」年月には、様々な葛藤があったようだ。それは山谷氏も感じるころであった。

開拓農協の組合長が何人も代わっているのですね。個人的にはいろいろな思いもあったようです。合わないところもあったみたいだけど、でも、それを人の前で語って、あの人はこうだあだと、そういうことで攻撃するかといえば、そうではなかったです。（中略）私もいろいろなことを聞こうとしたけれども、昔のことはあまり語りたがらなかった。（中略）そういうところをみんな探せばあちこちあるみたいだけれども、それでも何とかして山田野がまとまっていかなばまね（ならない）という気持ちでみんないたのではないかな。

かつての対立や葛藤を乗り越えて、地域がまとまっていこうという、そうした雰囲気は山田野にはあった。そして、山田野の人びとにとっての山田野分校の存在を、山谷氏は次のように捉えていた。

いろいろ考えてみれば、分校は山田野の人たちにとっては、やっぱり心のよりどころといえいいですか、いろいろなことに取り組むなかで気がついた、なおさら再確認しました。たとえば、鳴沢小学校という学校があったのですね。その鳴沢小学校は、山田野分校もとの本校であった東鳴沢小学校と、第一鳴沢小学校と、建石小学校が3校統合するという計画だった。でも、建石小は反対運動が起きて統合しなかった。だから、建石小と鳴沢小が鳴沢地区に残って、そのときに山田野分校も残されたのですね。（中略）しかし、山田野の人たちは分校をなくせばだめだという気持ちはあったね。

前述の、教員が不足して本校への通学を提案した際に、統合のきっかけを作るので1人で頑張りたい、といわれた逸話も表れているように、山谷氏は「分校の存在は山田野の人たちにとっては心のよりどころみたいなものになっているのだな」ということを再確認させられた」のだった。

そして山谷氏もまた、心のよりどころとしての分校の位置づけを、より確かなものにするべく取り組みを続けていく。以前から地域にとっての一大イベントであった学芸会は、山谷氏の在任時に保護者たちも出演できる形になった。

もうひとつ、学校文集『やまだの』にも変化が表れた。山谷氏在任最終年度の第10集（1974（昭和49）年度）から、副題が「子どもたちと父母、青年、教師の作品集」となり、在校児童だけでなく、保護者や地域の人びと、さらには卒業生が寄稿するようになった（このスタイルは最終第35集（2000（平成12）年度まで踏襲された）。そして大人たちは少しずつ、開拓の労苦や収穫の喜びを綴るようになっていった。この『やまだの』では、「あまり語りたがらなかった」昔のことが語られるようになった。それはのちに学校によって編まれた地域史である『山田野の昔を語る』として結実する。

このようにして、山田野の人びとにとっての心のよりどころとしての山田野分校は、山谷氏の実践によってその価値をそれまで以上に高めていったのである。

6. 自身にとっての分校での教育経験の意味

これまで見てきたような山田野分校での教育経験は、その後の山谷氏の教師としてのキャリアにどのような意味を持つものであったのか。山谷氏は、自身の変化を確かに感じていた。

次の学校に行ったときに、「何年生でもいい」といったら、1年生を受け持ったけれども、私はそのときには焦らなくなったというか、勉強がわからない子ども、それこそちゃんと教えさえすればちゃんと覚えるんだということの教育哲学みたいなものができていた。

それはひとつの自信にもなっていた。「山谷先生」は、赴任した学校で、「勉強を教えるのが上手」な人気の教師となった。

どの子どもでも教えさえすればちゃんとわかるのだ、子どもがその気になれば、やることわかればやっていくんだという気持ちでやっていたところで、保護者たちからは、「山谷先生に習えば、わらはんど（子どもたち）、勉強できるようになる」っていううわさが立ったりして。（中略）子どもたちは入学式に山谷先生が受け持ちだということで聞いて家に帰れば、「あら、山谷先生に習えば勉強できるようになるんだはんで、ちゃんと話、聞けよ」っていわれてくる。次の日から、子どもたち、目キラキラってして。

こうした変化は、山田野での教育経験にあると山谷氏は考えている。

それは山田野で子どもたちから教えられたと。それからもうひとつは、教育は焦ってもだめだけれども、しかし、1年勝負だと。というのは、今年ここがだめなら、持ち上がって来年またやればな、ではなくて、今やらなければならぬことは今年やらぬいとだめなのだということ。だから、1年のうちにちゃんと責任あることをやらねばだめだということ、1年ごとにちゃんと教育をまとめていかなければだめだということをも自分なりに体得したといえいいですかね。

山谷氏は、山田野分校での教育実践を振り返った文章²²において、そこでの教育経験を「教育の原点」「教育に開眼」という文言で表現している。そのうえで、あらためて次のように振り返る。

私自身とすれば、何も自信のある取り組みではなかった。本当にいい仕事したっていう気持ちはない。ただ、そのときそのとき、そうしたほうがいだろうなと思ってそれをやったにすぎない。そういうことしかできなかったということかもしれない。

それでも山田野での6年間は、総括すれば次のようなものであった。

山田野に6年間いたけれども、子どもたちに教えられたことばかりだっていえばいいか、本当にいい宝物ができたなっていう、教育の財産を作ったな、と思っていました。私は山田野で一生懸命やって、い

い先生だとか何とかでなくて、山田野に教えられたことがいっぱいあったと思っています。宝物です。

三部複式解消に象徴されるような、厳しい教育環境のもとでの教育経験は、教師としての自己形成過程においても、「宝物」「財産」として評価されるものであった。そしてここからは、学校（ここでは教師と読み替えてもよい）と地域社会とのきわめて豊かな関係性が当時の山田野地区にあったことを読み取ることができよう。

小括

本稿において対象とした、戦後開拓地における小学校分校のありようは、当時全国に数多く存在した山間部のへき地校と共通する側面と同時に、戦後開拓地の学校に固有の特徴を有していたと考えられる。ここで検討したのはあくまでも1970年代前半という限られた時期の、1人の教師からの視点という事例であり、安易な一般化は避けなければならないが、山田野開拓地における学校と地域社会の関係からは、次のような特徴が見えてくる。

第一に、戦後開拓地における分校は、へき地校としての普遍的な教育課題、端的には三部複式といった、授業を実施するうえでの環境の劣悪さに直面していたことが挙げられる。具体的な指導法が確立していなかで、教師たちは試行錯誤を重ねていった。ただし、こうした状況は同時に、分校の経営に一定の自律性が担保されていたことをも意味している。

第二に、上記のような教育課題を学校と地域社会とが共有することで、両者の相互作用や相互関係の深まりが認められることである。本稿の事例では、分校設立の過程に見られるように、地域社会における学校教育に対する強い関心が認められ、それは1970年代においても維持されていた。そこに三部複式解消といった課題が設定されたこと、加えて教師によって地域の人びとへの学校経営への参画が促されたことによって、学校と地域社会との紐帯は、より強固なものとなっていった。このことは山田野開拓地および山田野分校のきわだった特徴と見ることができる。

第三に、戦後開拓地の分校が、地域統合の象徴としての意味を有していたことがある。戦後開拓地においては、地域社会は「選択的」共同体という形で成立する。なかでも多様な属性の人びとからなる戦後開拓地においては、その傾向はより顕著になる。したがっ

て、そこでの共同性や人びとのつながりは、所与のものとしてあるのではない。ゆえに「選択的」共同体としての戦後開拓地は、共有するシンボルを必要とする。そうしたシンボルのなかでもひととき大きな存在となったのが分校であったと考えられる。そして、分校が「心のよりどころ」であることを看取した教師の実践は、そのシンボルとしての存在をそれまで以上に大きなものとしていった。

第四に、これまでに検討した学校と地域社会の関係の展開には、1人の教師の自己形成の過程が埋め込まれていることが挙げられる。それは教師の熱意が学校を媒介に地域社会を変えていくという一方向的なプロセスではなく、赴任と同時にそのつながりの強さから驚きを与え、また課題解決や学校経営に積極的に参画しようとする地域社会によって、新たな教育観を獲得するという、双方向的なものである。もちろんそのなかには、子どもたちから教えられるという要素も含まれる。だが、この子どもたちの姿というものも、その背後にある家庭や地域社会の存在を抜きにして捉えることはできない。

戦後開拓地は、その成立の経緯から、本稿が対象とした1970年代においては、まだ「歴史なき地域」であった。しかし1人の教師の取り組みは、そこにすでにある「歴史」を読み解き、綴っていくこととすることで、地域の「歴史」を創出しようとするものであった。そして実際に、学校としては閉校したものの、現在も地域の集会所として存続している旧山田野分校を拠点として、山田野の「歴史」はそこに関わった人びとによって今日まで語り継がれている。このような学校のありように、戦後開拓地における、学校を基盤とした地域文化形成のひとつの形を見ることができるといえる。

謝辞

本稿をまとめるにあたり、対象者の山谷信雄氏には聞き取り調査に加え、当時作成された資料をご提供いただくなど、多大なる協力をいただきました。特に記してお礼申し上げます。

附記

本稿は、日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（C）（一般）課題番号17K04519）による研究成果の一部である。

註

- 1 山田野という地名は、鱈ヶ沢町の行政上の地名ではなく、戦後開拓地およびその前身の陸軍演習場の名称に由来する通称である。
- 2 農林省開拓局指導部入植課編『緊急開拓事業集団開拓地入植状況調査』農林省開拓局指導部入植課、1949年、P. 54。なお山田野地区の開墾の経緯については、高瀬雅弘編著『山田野一陸軍演習場・演習廠舎と跡地の100年』弘前大学出版会、2014年を参照。
- 3 戦後開拓史編纂委員会『戦後開拓史』全国開拓農業協同組合連合会、1967年、P. 216。
- 4 青森県農林部農地調整課『青森県戦後開拓史』青森県、1976年、P. 175。
- 5 蘭信三「満州開拓団を母体とする戦後開拓集落における「共同性」—熊本県東陽開拓農協の事例—」『ソシオロジ』第33巻1号、1988年。
- 6 北村達「開拓地の社会構造—釧路国白糠町和天別戦後開拓地—」『僻地教育研究』第6号、1957年、門間薫吉「戦後開拓部落の実態（上）—戦後開拓農家はどのように階層分解したか—」同第7号、1957年、「戦後開拓僻地の社会構造—美瑛町五稜地区内部部落の事例研究—」同第11号、1959年など。
- 7 馬場四郎「コミュニティ・スクール理論の適用の可否に関する一検討—岐阜県山村の一事例について—」『教育社会学研究』第1集、1951年。
- 8 籠山京「開拓地」海後宗臣・牧野巽・細谷俊夫編集代表『講座教育社会学Ⅸ—へき地の教育』東洋館出版社、1956年。
- 9 田中謙・大津雅之・高木寛之「戦後1960～1980年代の山村小学校における『ソーシャルワーク的支援』の展開過程に関する事例研究—オーラルヒストリー法を用いた解釈的アプローチ分析—」『山梨県立大学人間福祉学部紀要』第13号、2018年。
- 10 開校時の名称は鳴沢村立東鳴沢小学校山田野分校であり、1955（昭和30）年に町村合併により鱈ヶ沢町立東鳴沢小学校山田野分校に、1972（昭和47）年に東鳴沢小学校と第一鳴沢小学校との統合により鱈ヶ沢町立鳴沢小学校山田野分校に、それぞれ名称が変わっている。
- 11 山田野の昔を記録する会『山田野の昔を語る』鳴沢小学校山田野分校、1994年。
- 12 鳴沢小学校も、2010（平成22）年度をもって鱈ヶ沢町立舞戸小学校に統合された。
- 13（指導）山谷信雄「青森県鶴田町水元小学校—あおぞらの子—」『子どものしあわせ』第5号、1956年。
- 14 床舞分校は、山谷氏の転出と同時に中田分校とともに森田小学校に統合された。
- 15 青森県西北分校教育研究会編『分校教育の記録』、1971年、P. 13。
- 16 山谷信雄「充実した山田野での教員生活」鳴沢小学校山田野分校閉校記念事業実行委員会編『鳴沢小学校山田野分校閉校記念誌』、2002年、P. 36。
- 17 前掲『分校教育の記録』、P. 16。

¹⁸ 高瀬雅弘「戦後開拓地のライフヒストリー（４）―青森県鱒ヶ沢町山田野地区における女性たちの地域性と共同性―」『弘前大学教育学部紀要』第113号、2015年。

¹⁹ その内容は、現代の教育課題にもつながる普遍的かつ豊かな価値を有するものであるが、紙幅の関係上、ごく一部を紹介するにとどめざるを得ない。詳細な検討については他日を期したい。

²⁰ 山谷信雄「複式学級解消運動―地域住民による教育要求実現の足跡―」西郡へき地・複式教育研究会編『源流への回帰―西へき研40周年記念誌―』、1989年、P. 97。

²¹ 山谷信雄「山田野に見た『教育の原点』」『山田野分校創立30周年記念誌「やまだの」』、1984年。

²² 同上。

(2018. 8. 8 受理)